

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19520553  
 研究課題名（和文） 歴史資料による白神山地の景観と環境の変容に関する研究  
 研究課題名（英文） Research concerning changes in the spectacle and environment of Shirakami sanchi, as indicated by historical resources  
 研究代表者  
 長谷川 成一（HASEGAWA SEIICHI）  
 弘前大学・人文学部・教授  
 研究者番号：20013287

## 研究成果の概要：

世界自然遺産の白神山地に関して、現在までに残されている史資料を網羅的に調査・収集し、18世紀から19世紀にかけての白神山地の山相・樹相を復元した。加えて、同山地で働く人々の生業について、具体的には18世紀における尾太銅鉛山が稼行された時期を中心に、秋田・津軽両領の鉱山労働のあり方や鉱山経営の実態を明らかにした。白神山地の森林資源の活用のあり方についても、同山地における流木（ながしぎ）と称された薪材の伐採地域と資源保護の状況を年次を追って明らかにした。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学日本史

キーワード：世界自然遺産、白神山地、流木、尾太銅鉛山、津軽領、弘前藩、ブナ林、秋田領

## 1. 研究開始当初の背景

17世紀以来近代に至る約270年間にわたって白神山地を支配下においてきた弘前藩や秋田藩の資史料を見ると、白神山地は「手つかずの自然」と称し得るのかどうか、はなはだ疑問である。この点については、世界自然遺産の評価全体に関わる問題であるから、慎重を期さねばならないのは勿論であるが、従来、あまりにも自明のこととして何ら疑問を呈されることなく、不問に付されてきた経緯がある。自然科学や自然地理学などの立場は別として、歴史学の見地からは、ほとんど

研究がなされてこなかった。

また藩領を越えた山の民同士の交流、山の民と平地の民との河川を介しての交流は、従来、民俗学の立場からの日常生活のあり方に視点を置いた研究は見られたが、林業史や鉱業史など歴史学からのアプローチは、本格的になされてこなかった経緯がある。

## 2. 研究の目的

(1) 白神山地の林業の研究は、秋田藩側では、自治体史などに秋田領の林制全体から言

及した研究がみられ、研究蓄積は比較的多い。一方、弘前藩に関しては、津軽領西海岸地帯を主対象とした、近年の黒瀧秀久氏による概括的な研究が発表されたが、緒についたばかりである。まず同山地に関する両藩の林業経営を解明することから始めることにする。

幕藩体制確立期の弘前・秋田両藩の林業政策の相違はどのようなものであり、近世初頭からどのように変化したのか、関係の藩政資料から記事を悉皆的に抽出することで、両藩による白神山地の活用は藩政期を通じていかになされたのか、その点を明らかにする。

(2) 本研究では、『日本林制史調査資料』(秋田藩・弘前藩)や津軽家文書・八木橋文庫に見える後期林業経営に関わる資料を抽出して、当該期の弘前・秋田両藩林業の基礎的なアウトラインを把握して、林業経営から見た近世後期両領白神山地の特色を明らかにする。

(3) 白神山地は林産資源だけでなく、鉱産資源にも恵まれた地域であった。特に同山地は津軽・秋田両領でも鉱山密集地帯であり、代表的な鉱山としては、尾太銅山や太良鉛山があげられる。周知のように鉱山は、製錬や坑道の維持に莫大な材木を消費し、津軽・秋田両領にあっても同様であった。鉱山と森林資源の消費や鉱山労働力の移動の問題など、同山地鉱山周辺地帯の景観と環境変容、民衆生活に関する多くの情報を得るようにする。

(4) 近代に入ってから白神山地に関しては、明治期の営林局による施業案を主体に検討することにしたい。昨年、青森森林管理局が閉鎖されて資料は秋田の同局へ移管替えになったが、白神山地に関する同案を集中的に調査収集して、政府が同山地をどのように経営しようと企図したのか、実際に経営方針はいかにして実行され、その結果、同山地の植生や景観・環境は藩政時代と比較してどのような変容を余儀なくされたのか、それは現代の白神山地を世界遺産として維持して行く中でどのような教訓を我々にもたらすものなのか、それらについて見通しを得ることにしたい。

### 3. 研究の方法

(1) 基礎作業として、「弘前藩庁日記御国日記」や秋田県立公文書館所蔵各文書に見える白神山地関係記事を網羅的に収集することから開始した。同山地を描いた正保国絵図をはじめとする各絵図類を調査・収集して、藩政時代に同山地が藩によってどのように把握されていたのか、「津軽国図」などの絵図類に見える植生、鉱山の描写、村落の状況、藩による山林・鉱山支

配の相違から、藩政時代の同山地の環境史を把握した。

資料の収集と分析に当たっては、近世北方史を専門としている本学大学院生の協力を得た。また、巨大絵図類を明晰に把握するためには、トレース図化する必要があり、その作業にコンピュータソフトのイラストレーターが必要。トレース図作成には、本学大学院生に作業を依頼した。

資料の収集は、高精細のデジタルカメラを使用し、コンピュータに取り込んで画像処理をする。上記の院生たちに、処理作業を依頼した。

(2) 林業に関しては、近年森林管理局所蔵資料が注目されているが、青森県の同局資料の整理をかねて同山地の関係史料を発掘し、同山地研究に新たな光を当てることにした。また、同山地は弘前藩最大の鉱山地帯であり、住友史料館所蔵の同山地尾太銅山関係史料の収集を図り、尾太銅山関係史料の収集を図った。また秋田市の東北森林管理局所蔵の近代における同山地の施業案などの資料を収集した。

史料の収集と分析に当たっては、近世秋田藩の鉱山政策と近代林業を専門としている本学大学院生の協力を得た。

史料の収集は、高精細のデジタルカメラを使用し、各史料の情報を分類しエクセルによってデータ化を図る。上記の院生に、入力などの作業を依頼した。

(3) 1993年に白神山地と一緒に世界自然遺産に登録された屋久島と、同島に隣接する奄美大島のフィールドワークをおこない、亜熱帯の植生を実際に確認して白神山地のそれとの比較検討を行った。

(4) 国有林関係資料保存問題に関するシンポジウムが、筑波大学で開催され、それに参加して、森林管理局保管文書に関する情報を収集した。

### 4. 研究成果

本研究の成果は、次の2段階に分けることができる。

第1段階として、世界自然遺産の白神山地に関して、主に調査・収集した史料は、弘前市立図書館の「弘前藩庁日記御国日記」と東北森林管理局青森事務所の津軽領内全森林を書き上げた沢名台帳、秋田領側の秋田県公文書館資料であった。それによって、前近代における白神山地の森林相並びに弘前藩・秋田藩の林業政策の相違、同山地の位置づけの違いが明確になった。

秋田藩側では、植林を積極的に推進して、同領白神山地の林勢の維持を図った。津軽領側は、人口密集地である弘前城下に同領白神山地目屋野沢が近接していたため、燃料であ

る薪材の供給地として位置づけられ、植林はほとんど行われず、輪伐（10年間隔）による資源維持に努めたことが判明した。

ついで、同山地所在の藩政期鉾山に関しても、18世紀前半を中心とした史資料の収集をほぼ終えて、尾太銅鉛山の稼行実態や鉾業地帯における自然景観の変容などについても、見通しを立てることができた。

そのほか、白神山地との比較で同じ世界自然遺産の屋久島についても、絵図資料の収集を図り、17世紀中葉の同島における森林相を復元し、屋久島の自然景観の総体を把握できた。ついで薩摩藩の林業政策についても関係資料の収集と検討を行った。

第2段階として、第1段階で調査・収集した史資料と成果に基づいて、次のような成果を得た。

(1) 18世紀後半から19世紀初頭に至る白神山地の森林相だけでなく、津軽領内全域のそれを復元することが可能となった。領内の山々に茂っていた樹木は、檜（アオモリヒバ）、杉、松、槻、サワラなどであり、これらは商品材木として藩財政に貴重な収入をもたらしたが、そのほかの樹木は、雑木として主に民衆の生活燃料に活用された。その結果、白神山地のなかの、白神岳などを除いた標高の低い山地では、近世後期にはいると、商品材木はほとんど切り尽くされ、雑木が主体の山々に変貌したことを明らかにした。

(2) 18世紀の白神山地を挟んで、津軽領と秋田領の人々がどのような自然環境と向き合い、その中でいかなる生業を営んでいたのかを明らかにした。加えて尾太銅鉛山の稼行と森林景観の変容などについても、前近代という時期的な限定はあっても見通しを立てることができた。

具体的には、秋田領では現在の北秋田地方、津軽地方では領内全域からの労働者が尾太鉾山に集まった。秋田領からの民衆は、尾太鉾山で「秋田者」と称されて、一つの勢力を形成した。つまり鉾山の経営には、秋田・津軽両領の労働力が藩境を越えて必要であったことを明らかにした。秋田側の太良鉛山鉾山からの労働力流出も確認され、両鉾山の労働力需要は互いに拮抗するものであって、これが経営の大きな問題点であったことを明らかにした。

(3) 弘前藩による白神山地の流木(ながしぎ)薪材を津軽領ではこのように称する)伐採のあり方の検討を通じて、同山地の林業経営と岩木川を通じた近世都市弘前のつながりが明確になった。

(4) 近世津軽領で「天気不正」の風聞・伝承が近世後期に入ると、記録類に数多く認められる。それは、白神山地の青鹿岳付近（秋田藩領との境）に開坑した大滝又鉛山鉾山における鉛の採掘が原因の天気不正の風説で

あった。白神山地での人間の生業が領内の天気や穀物生産に大きな影響を与えたことを明らかにした。この点については、現代に通じる教訓として、今後の白神研究の中でさらに深めて行くべき問題と考える。

(5) 近代の白神山地に関する施業案については、同資料が青森から秋田の森林管理局へ移管することになっていたが、事情が急変し、国立公文書館分館へさらに移管することが判明した。そのため、管理局資料の公開が全くなされず、収集は不可能であったが、関連のシンポジウムに参加して、この間の情報収集を実施し、今後の調査・収集に資するように努めた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 長谷川成一、近世津軽領の「天気不正」に関する試論、弘前大学大学院地域社会研究科研究年報、5号、23-43、2008年、査読有

② 長谷川成一、天和～正徳期(1681-1715)における尾太銅鉛山の経営動向、人文社会論叢、20号、43-65、2008年、査読無

③ 長谷川成一、18世紀前半の白神山地で働いた人々、白神研究、5号、18-25、2008年、査読有

④ 長谷川成一、近世初期の鉾山開発と「天下之御山」論、『北方社会史の視座』第3巻、59-88、2007年、査読有

[学会発表] (計2件)

① 長谷川成一、18世紀における新興商人の活動の軌跡－津軽領・足羽次郎三郎の活躍と凋落－、2008年、18世紀日本の文化状況と国際環境、2008年8月22日、国際日本文化研究センター

② 長谷川成一、世界自然遺産白神山地の18世紀、18世紀日本の文化状況と国際環境、2007年10月26日、国際日本文化研究センター

[図書] (計1件)

① 長谷川成一、清文堂出版、北奥羽の大名と民衆、2008年、253頁、

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕  
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 成一 (HASEGAWA SEIICHI)  
弘前大学・人文学部・教授  
研究者番号：20013287

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし